

古典文法 助動詞⑥ 「む、むず」

文法的意味

む・むず

「 推量 」	「—だろう」
「 意志 」	「—しよう(とするとする・と思う)」
「 勧誘 」	「—しませんか」
「 適当 」	「—するのがよい」
「 仮定 」	「もし—したらそのような」
「 婉曲 」	「—のような」

頭文字を並べて

「すいかかえて」

「む・むず」の文法的意味の見分け方

・一人称主語 Ⅱ「**意志**」 我行かむ。(行こう)

・二人称主語 Ⅱ「**勧誘・適当**」 汝こそ行かめ。(行くのがよい・行きませんか)

※「こそ—め、なむ(なむや)、てむ(てむや)」の形が多い。

・三人称主語 Ⅱ「**推量**」 雨降らむ。(降るだろう)

・「む」+名詞・助詞 Ⅱ「**仮定・婉曲**」 雨降らむ時に・雨降らむに

(もし降るとしたらその時に・降るような時に)

※「むは、むに、むも、むこそ、むが」など。

【練習1】傍線部を口語訳し、そこに含まれる助動詞「む、むず、じ」を文法的に説明せよ。

(例文)風波やまねば

(口語訳)止まないいで (文法的説明)打消の助動詞「ず」の已然形。

1 此の獅子の立ち様、いと珍し。深き故有らん。」と
涙ぐみて 故理由・わけ

この獅子の立ち方は、大変珍しい。――。〈徒然〉

2 千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。

心地 気持ちこそ強意の係助詞。特に訳さない せサ変「す」の未然形。する

たとえ千年を過ぐすとしても、一夜の夢のような――。〈徒然〉

3 此れを待つ間、何の樂しびか有らむ。

か 反語の係助詞。―か、いや―ない

4 「我登りて探らむ。」と宣給ひて、

5 「御迎へに来む人をば、長き爪して眼をつかみ潰さむ。

6 「燕、子産まむとする時は、尾をささげて

7 法師は人に疎くてありなむ。

人俗世間の人 疎し疎遠である な 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。ここでは特に訳さない。

8 我が身のやむごとからむにも、まして数ならざらむにも、子といふもの無くてありなむ。

な 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。ここでは特に訳さない

9 己れは此の度罷り外れなば、いみじう辛かるべき事にてなむ侍るべきを、退かせ給ひなむや。」と申し給ひければ、

退か 辞退する せ 尊敬の助動詞「す」の連用形。―なさる 給ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる な 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。―ここでは特に訳さない や 疑問の係助詞。―か

この老いと死が来るのを待つ間、――。〈徒然〉

(誰も役立ちそうにないので、中納言は)「私が自分で天井に登つて――。」とおっしゃって〈竹取〉

「かぐや姫を迎えに来る人がいたら、そいつの眼を長い爪で――。〈竹取〉

「燕が――時は、尾羽を持ち上げて〈竹取〉

僧たる者は、――。〈徒然〉

自分自身が高貴な身分であつても、まして取るに足りない身分であつても、子どもなどというものは、――。〈徒然〉

私は今回の人事に漏れましたら非常につらいことですから、どうかあなたは――。」と申しなさつたところ、〈大鏡〉

10 忍びては参り給ひなんや。
しの まゐ たま

参り(宮中に)参内する 給ひ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―
になる な 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。ここでは特に
訳さない や 疑問の係助詞。―か

11 「袖と袂と一首の内に悪しかりなんや。」と定家卿
そで たもと いっしゆ うち あ ていかのきやう

に尋ね仰せられたるに
たづ おほ

悪し 下手だ・まずいな 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。こ
こでは特に訳さない や 疑問の係助詞。―か

12 「又返さの車飛ばし騒がむに、我らは生きてはあり
また かへ くるまと さわ われ い

なんや。

な 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。ここでは特に訳さない
や 反語の係助詞。―か、いや―ない

13 此の車にてまた帰らば、我らが命は有りなんや。
こ くるま かへ われ いのち あ

な 強意(完了)の助動詞「ぬ」の未然形。ここでは特に訳さない
や 反語の係助詞。―か、いや―ない

14 心付き無き事あらむ折は、なかなかその由を言
こころつ な こと をり よし い

ひてむ。

て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。ここでは特に訳さない

15 如何にぞ早、落忌をこそし給ひてめ。
いか はや としみ たま

落忌 精進落とし こそ 強意の係助詞。特に訳さない 給ふ
尊敬の補助動詞。―なさる て 強意(完了)の助動詞「つ」の未
然形。ここでは特に訳さない

こつそりと、――。 〈源氏〉

(後鳥羽院が)「袖と袂の二語を
一首の和歌の中に入れるのは、
――。」と藤原定家卿にお尋ねに
なられたところ 〈徒然〉

「また帰りの牛車をがたがた急
がせるとしたら、(きつい車酔い
のせいで)――。 〈今昔〉

この牛車でまた帰るならば、(き
つい車酔いのせいで)――。 〈今
昔〉

気に入らないことがあるときは、
それをかくすよりも、かえって
そのことを――。 〈徒然〉

どうですか、あなたも早く――。

〈蜻蛉〉

16 此^この鳥羽^{とば}の田^たや米^{よね}などには替^かへてんや。

替^かふ 交換する て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。ここでは特に訳さない や 疑問の係助詞。―か

17 (竹取^{たけとり}の翁^{おきな}が、かぐや姫^{ひめ}に)「―翁^{おきな}の申^{まう}さむ事^{こと}は聞^きき

給^{たま}ひてむや。」と言^いへば、

給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさる・お―になる て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。ここでは特に訳さない や 疑問の係助詞。―か

18 「彼^かの在^ありし中納言^{ちゅうなごん}の子^こは得^えさせてむや。らうたげ

に見^みえしを。身^み近^{ぢか}く使^{つか}ふ人^{ひと}にせむ。

させ 使役の助動詞「さす」の連用形。―させる て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。ここでは特に訳さない や 疑問の係助詞。―か

19 帝^{みかど}「さて何^{なに}も書^かきたらん物^{もの}は読^よみてんや。」と仰^{おほ}せ

られければ、

て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。きつとや 疑問の係助詞。―か

20 腕^{うで}をば捻^ねぢて腹胸^{はらむね}を踏^ふまんに、己^{おのれ}は生^いきてんや。

己^{おのれ} お前 て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。ここでは特に訳さない や 反語の係助詞。―か、いや―ない

21 御使^{つかひ}の少将^{しょうしょう}急^たぎ給^{たま}ふに、「などかくは急^{いそ}ぎ給^{たま}ふ。花^{はな}

を見てこそ帰^{かへ}り給^{たま}はめ。」とて、

給^{たま}ふ 尊敬の補助動詞。―なさる

(その馬と、)この鳥羽の地の田や米などと――。〈宇治拾遺〉

「―この私が申し上げる事を、どうか――。」と言ったところ〈竹取〉

「あのこないだの故中納言の子は、私に――。かわいらしく見えたことだ。私の身近で使う者になりたい。」〈源氏〉

帝が「それでは何であつても書いてある物なら、お前は――。」とおっしゃられたところ〈宇治拾遺〉

お前の腕をねじって腹と胸を踏みつけたら、――。〈宇治拾遺〉

使者の少将が早く宮中に帰ろうとなさると、兼雅は「どうしてそのようにお急ぎになるのか。桜の花を見た後で――。」と言って〈宇津保〉

22 ししこらかしつる時はうたて侍るを、疾くこそ試み
させ給はめ。」など聞こゆれば、
させ 尊敬の助動詞「さす」の未然形。―なさる 給ふ 尊敬の補
助動詞。―なさる

23 「斯様の物をば、其の用意をしてこそ射給はめ。」と
言ひければ、 給ふ 尊敬の補助動詞。―なさる

24 「出でさせ給ふは何方ぞ。―召し使はせ給はんと
召さん限りは、召してこそ使はせ給はめ。
召す「呼ぶ」の尊敬語。呼び寄せなさる せ・給ふ 共に尊敬。―
なさる

25 椎柴、白檜などの濡れたる様なる葉の上にきらめき
たるこそ、身に沁みて、心あらむ友もがな、と都
恋しう覚ゆれ。 心あり 物の情趣を解する

26 「衣の用有らん時は、参りて申せ。

27 佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや。我と思はん人々
は、高綱に組めや。」とて、をめいて駆く。

病気をこじらせてしまふと厄介
でございますから、早く（その行
者の祈祷を）――。」などと申し
上げるので（源氏）

「この様な動く物に対しては、そ
れ相応の心構えをして――。〈今
昔〉

（夜中に出かける親王を見とが
めた乳母が）「お出かけになるの
はどちらか。―その者を使役な
さろうとお考えになるのなら、
（あなた様が出向くのではな
く、）その者を――。〈和泉式部〉

椎や白檜などの、まるで濡れた
ように艶のある葉の上に、月の
光がきらきら輝いている様子は、
しみじみ趣深く感じられて、――
―が近くにいればなあと、都が
恋しく思われる。〈徒然〉

「衣類の必要が――、ここに参上
してそう申せ。〈宇治拾遺〉

私は佐々木四郎高綱、宇治川の
先陣である。――、この高綱と勝
負せよ。」と言って、叫びながら
突進する。〈平家〉

28 宝の山に入りて、手を空しくして帰りたらむ心地ぞ
する。 たら 完了の助動詞「たり」の未然形。―た 心地 気分
ぞ 強意の係助詞。特に訳さない

29 「龍の首に五色に光る玉あなり。其れ取りて奉らむ
人^{ひと}には、願^{ねが}はむ事を叶^{かな}へむ。」とのたまふ。
奉る 献上する

30 「若し射外しぬるものならば、汝が欲しく思はん物
を所望^{しよまう}に従ひて与^{あた}ふべし。」と定めて
汝 お前

31 「此の皮衣は、火に焼かむに、焼けずは真ならめと思
ひて、人の言ふ事にも負けめ。 に 格助詞。―の時に

32 女の申さく、「我后と成らむに、限り無き喜びな
りといへども、 に 格助詞。―の時に

33 腕をば捻ぢて腹胸を踏まんに、己は生きてんや。
に 格助詞。―の時に

34 し出ださむを待ちて寝ざらむも悪かりなむ、と思ひて
ざら 打消の助動詞「ず」の未然形。―ない

宝の山に入つて、何も取らず手
ぶらで――。〈今昔〉

「龍の首には五色に光る玉があ
るという。――、願うことをかな
えてやろう。」とおつしやる。〈竹
取〉

「もし俺が矢を射外したならば、
――、望み通り与えよう。」と約
束して〈古今著聞集〉

この火鼠の皮衣は、――、焼けな
ければ本物だろうと思つて、あ
の方の言うことに従おう。〈竹
取〉

女が帝に申し上げるには、「――、
それはこの上ない喜びではあり
ますけれども〈今昔〉

お前の腕をねじつて――、お前
は生きていられようか、いや生
きていられまい。〈宇治拾遺〉

僧たちがぼたもちを作り上げる
のを待つていて――具合が悪い
だろう、と少年は思つて（寝たふ
りをすることにした）。〈宇治拾
遺〉

35 僧そうの「物申し候さぶらはん。驚おどろかせ給へ。」と言いふを、嬉うれしとは思おもへども、只一度に答へいんも、待ちけるかともぞ思おもふとて、

36 厭いとはしげに言いはんもわろし。

厭いとはしげなり嫌きらそうだ・煩わづわしそうだ 言いふ 会話をする
わろし よくない

37 義景よしかげ、「皆みなを張はり替かへ候さうらはむは、遙はるかに容易たやすく候さうらふべし。まだらに候さうらふも見苦みくるしくや。」と

候さうらふ 丁寧の補助動詞。――ます

38 切りぬべき人無ひとくは、給たべ。切きらむ。」と言いひたらんは、猶なほ良よかりなむ。何なんでふ百日ひやくにちの鯉こひを切きらむぞ。たら 完了の助動詞「たり」の未然形。――た

39 錢ぜにあ有もちれども用もちゐざらむは、全まったく貧者ひんじやと同じ。ざら 打消の助動詞「ず」の未然形。――ない

40 「いとわろき名なの、末すゑの世迄よまで有もちらんこそ、口惜くちをしななれ。」と言いふ程ほどに

末の世 後世 こそ 強意の係助詞。特に訳さない

41 女をんなは、髪かみのめでたからんこそ、人ひとの目立めたつべかんめれの主格の格助詞。――が めでたし すばらしい・美しい こそ 強意の係助詞。特に訳さない

僧が「もしもし、ぼたもち作ったから起きて下さい。」と言うのを、少年はうれしいと思うけれども、たった一回で――、寝たふりで待っていたかと思われるのが困るので〈宇治拾遺〉

（来客があつた時に、）――。〈徒然〉

（明かり障子の破れた箇所だけ紙を張る妹を見て、）兄の義景が、「――、ずっと簡単でしょう。まだらになりますのも見苦しいかと。」と〈徒然〉

他にその鯉を切ることのできる人がいないなら、私に下さい。私が切ろう。」と――、さらに良いだろう。どうして百日鯉を切っているなどと言う必要があるのか。〈徒然〉

金を持っていても――、全く貧者と同じである。〈徒然〉

「たいそう良くない名前が、――、情けないことだろう。」と言っている時に〈枕〉

女というものは、――、人が注目するようだ。〈徒然〉

42 めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性見えん

こそ、口惜しかるべけれ。

見ゆ 見せる・態度に出す 口惜し 残念だ べけれ 推量の助動詞「べし」の已然形。―だろう

43 親にも君にも、総てうち語らふ人にも、人に思はれむ

ばかり、めでたき事はあらし。

思ふ 愛する れ 受身の助動詞「る」の未然形。―される ばり―ほど

44 「…今は帰るべきになりになれば、この月の十五日に、

かの本の国より、迎へに人々 詣で来むず。

詣で来 参上する

45 此の事洩れぬる物ならば、我疑はれなんず。

れ 受身の助動詞「る」の連用形。―される な 強意の助動詞「ぬ」の未然形。きつと・必ず

46 我は命みじかき族なり。必ず死なむず。

47 院宣 伺はうに一日が逗留ぞ有らんずる。

有り（時間が）必要である・掛かる

立派だと思っていた人が、――、残念であるに違いない。〈徒然〉

親であろうと、主君であろうと、普段仲の良い人であろうと、とにかく誰か人に――、すばらしいことはないだろう。〈枕〉

「今となつてはもう帰らなければならなくなつたので、今月の十五日に、あの本国（月）から、私を迎えに――。〈竹取〉

この計画がもし洩れたとしたら、――。〈平家〉

私は寿命の短い一族である。――。〈大鏡〉

都で後白河法皇の院宣を頂くのに、一日の滞在時間が――。〈平家〉

48 此の児、定めて驚かさんずらんと待ち居たるに、
定めてきつと驚かす起こす らん 現在推量の助動詞「ら
む」の終止形。―だろう

49 心に思ふ様、「親の宝買ひに隣の国へ遣りつる銭を
亀に換へて止みぬれば、親如何に腹立ち給はんずらん。
如何にどれ程・どんなに 給ふ尊敬の補助動詞。―なさる ら
ん 現在推量の助動詞「らむ」の終止形。―だろう

50 此の殿の父、討たれぬと聞いて、如何許か嘆き給は
むずらむ。あはれ助け奉らばや。
如何許どれ程・どんなに か疑問の係助詞。―か 給ふ尊敬
の補助動詞。―なさる らむ 現在推量の助動詞「らむ」の終止形。
―だろう

51 九条辺りなる人の家に、物へ行かんずる様にて立ち
騒ぐ所有り。物ある所・どこか。行き先を曖昧にぼかす表現

52 良き馬を引出して、「異物は候はねば、此の馬を御
布施には奉り候はんずるなり。」と言ふ。
奉る献上する・差し上げる 候ふ丁寧の補助動詞。―です・ま
す・ございます なり 断定の助動詞「なり」の終止形。―だ・である

53 悲しき目を見せしかば、其の筈に炙り殺さんずるぞ。
とて、火を山の如く焚きければ

この児が、(僧たちが自分を)――
―と寝たふりをして待っている
と(宇治拾遺)

子が心に思うことには、「親が宝
を買うために私を隣の国に行か
せた、その金を亀と交換してし
まったので、――。(宇治拾遺)

このお方の父は、わが子が討た
れたと聞いて、――。ああ助け申
し上げたいものだ。(平家)

九条辺りにある人の家で、――
様子で騒がしい所がある。(宇治
拾遺)

男がよい馬を引いてきて、「他に
これといった物もございません
ので、この馬をあなた様へのお
布施として――。」と言う。(宇
治拾遺)

俺をつらい目にあわせたので、
その仕返しに――。―と言って、
火を山のように焚いたので(宇
治拾遺)

54 「敵かたぎ 既に寄すでせたるに、方々かたがたの手分けてわをこそせられ
むずれ。」 られ 尊敬の助動詞「らる」の未然形。――なさる

55 後の御孝養のち けうやうをこそ、良よく良よくせさせ給たまはんずれ。
セサ変「す」未然形。する させ／給ふ 尊敬「さす」尊敬の補助
動詞。――なさる

56 従者ずさいちにん一人 失うしなひてんずる事ことは損そんなれども
て 強意(完了)の助動詞「つ」の未然形。ここでは特に訳さない

57 いますがりつる 志こころざしどもを、思おもひも知しらで、罷まかりな
むずる事ことの口惜くちをしう侍りけり。
罷る 帰ります な 強意の助動詞「ぬ」の未然形。ここでは特に
訳さない

敵が既に攻め寄せてきているの
で、あちらこちらの手分けを――
。〈保元〉

死後の御供養を、念入りに――。
〈保元〉

――損であるけれども 〈古今著
聞集〉

私(かぐや姫)にかけて下さった
多くの厚情を、身にしみて感謝
もしないうちに、(月に)――が
残念でございます。 〈竹取〉